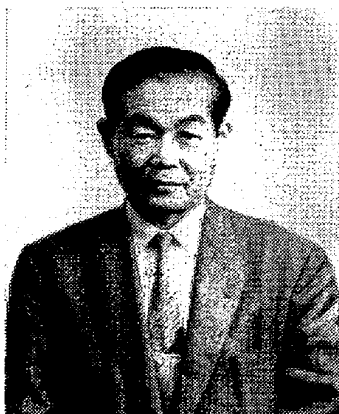


随 想

余 徳

酒 井 佐 敏*



レジャーブームという言葉が盛んに使われているが、それがレジャーを創り出すために興つたブームなのか、創り出されたレジャーを楽しむために興つたブームなのか、私は一向に知らない。しかしいずれにしても「余暇」を創り出し、それを楽しむということは個々の人間生活にとつて誠に結構この上もないことと思う。アメリカ帰りの人々の話をきいてむこうの生活を羨んだのは 10 年そこそ昔のことであるのに、わずかここ数年の間に私達のま

わりには電気洗濯機、テレビ、電気冷蔵庫がごく当り前のものとして眺められ、自家用車からモーターボート遊びまでが流行しようという時代になつて来ている。薪を背負つて本を読む二宮金次郎の像が尊ばれた昔にはむしろ悪徳と考えられたことが、喜ぶべき現象として世人から迎えられるのは、それが単に個人の「ぜいたく」から社会性をもつた楽しみに変貌した。いいかえれば「余暇」が大衆のものとして、大衆によつて享受されるものとなつたからであり、それを可能にしたものが個人のいわゆる勤儉力行によるものではなく国民全体の努力による社会的経済的水準の向上によるものであるがゆえであらう。

「余暇」とはあくまでも余つた時間、時間に関する「ゆとり」に他ならない。

私が言いたいのは我々日本人にとつては時間に関する「ゆとり」ばかりでなく、いろんな意味の「ゆとり」を楽しむことが大切であるということである。

「余暇」が時間に関する「ゆとり」であるならば空間に関する「ゆとり」は「余地」とでもでも名付けたらよからうか。狭い我が家、狭い道路に溢れるばかりの人と車、狭い敷地にギッシリ建てられた工場。しかし、この狭い国土でもまだまだ「余地」を創り出す可能性が多く残されているのではあるまいか。新しい国づくりという言葉があちらこちらでかかれるが「余地」もまた「余暇」と同じく個々の人間の努力によつてではなく、国民全体が力を併せ計画的に創り出してゆくべきものであらう。

ところで、「余暇」を創り出すにも、また「余地」を創り出すにも先立つものは金である。電機産業への投資が家庭電気器具の量産を可能にし、これが「余暇」を創りだしてさらに次の需要と新しい企業を育てあげる。かくして多くの耐久消費財の生産が伸び、各種の食品工業が成長した。この原因と結果の連鎖反応は「余地」の創造の場合にも「余暇」の創造におけると同様の機構で行われるであらう。具体的には国づくりの主体をなす工場づくりにおけるコンビナートの形成に見られる通りである。

この企業への資金の流入は金の「ゆとり」、いうなれば「余金」をもつ大衆の活発な投資意欲によつて支えられていることも世上よく知られた事実である。いわゆる「所得倍増」政策が適切な行政によつて実効をあげて国民大衆に「余金」を与え、より旺盛な需要と投資意欲とをうみ出して行くことを願うのは筆者ひとりではあるまい。

しかしながら、この「余金」を創り出すことはなかなか容易なことではない。これが出来れば、「余地」、「余暇」は適切な道をつくつてやることによつて自ずと生まれ出てくるであらう。では、「余金」

* 本会評議員、住友金属工業株式会社専務取締役

を創り出すものは何であろうか。

われわれの日々の生活をふりかえつてみると、何かしていないと気がすまない。いかにも忙しげに飛びまわつてはいるが、その実、むしろ折角創り出された「余暇」をただ慌しく過しているという場合が案外多いのではなかろうか。必ずしも閑寂な禅堂、茶室を必要としない。通勤の車中、幸いにも獲得した座席に腰をおろして、またほつと一息ついた昼休みの一刻に、しばらく思いを遠い将来に馳せ、視野を世界に拡げてものを考える心の「ゆとり」—「余心」—が欲しいものである。己れの仕事を通じて国の向背と世界の進展に思いを致す「余心」を持ちたいものである。過剰設備投資などという議論も、狭い日本国内を対象にした、目先のことに囚われ過ぎた考えではなかろうか。積極的な設備合理化によるコストダウンによつて世界の市場で互角に戦える実力を養うならば、鉄鋼生産 4000 万トンや 5000 万トンの生産ではなお足りないという嬉しい悲鳴がきかれるのではなかろうか。

私は「余心」こそ新しい着想と、困難への勇気を産み出す母胎であり、「余金」を、ひいては「余地」、「余暇」を創り出す基盤であつて、何物にも勝つてこれを大切にしなければならないと思う。「余徳」と題した所以である。

Tetsu-to-Hagané Overseas Vol. 1 No. 1 の内容および発行について

さきに4月号および5月号会告にてお知らせ致しました Tetsu-to-Hagané Overseas の Vol. 1 No. 1 はいよいよ6月末に発行のこととなりましたが、その内容は下記のとおりであります。なお購読を御希望の方は、下記要領にて御申込み下さい。

記

(I) Tetsu-to-Hagané Overseas Vol. 1 No. 1 の内容

会長挨拶	
展 望	日本の鉄鋼業について
協会記事	春季大会記事
研究報告	自溶性焼結鉍の製造について (鉄と鋼, 46 (1960) 4号, 5号) 八幡製鉄 辻 畑 敬 治, 他
	スラグ塩基度の新しい尺度および両性酸化物を含むスラグの塩基度 (鉄と鋼, 46 (1960) 4号) 茨城大 森 一 美
	鋼の連続鑄造に関する研究 (鉄と鋼, 46 (1960) 7号, 14号) 住友金属工業 明 田 義 男, 他
	シャルピー衝撃試験における荷重—時間曲線の研究 (鉄と鋼, 46 (1960) 2号, 12号) 東京工大 作 井 誠 太, 他
アブストラクト	鉄と鋼, 46 (1960) 7~12号
鉄 共 研 報 告	計測部会報告
技 術 資 料	最近の溶鉍炉作業の進歩 (鉄と鋼, 46 (1960) 5号) 八幡製鉄 和 田 亀 吉
特 許 記 事	鉄と鋼, 46 (1960) 7~12号
生 産 統 計	1960年の統計
工場・製品紹介	八幡製鉄, 富士製鉄

以上約 100 ページの予定

(II) 購読申込要領および頒価

- i) 希望者は Tetsu-to-Hagané Overseas と明記のうえ前金 (現金書留) を添えて申込むこと。
- ii) 申込先: 東京都千代田区丸ノ内2~10仲14号館 日本鉄鋼協会
- iii) 頒価

	1 部	1 年 (4 部)
国内 { 会 員	500円	2000円 (送料とも)
{ 非会員	1000円	4000円 (")
外国 { 会 員	\$ 2.00	\$ 8.00 (")
{ 非会員	\$ 4.00	\$ 16.00 (")